

太宰治「律子と貞子」論

——貞子が語る〈十二月八日〉——

一、はじめに

「律子と貞子」は一九四二年二月一日に雑誌『若草』（第十八卷第二号）の小説欄に発表され、同年の四月一六日に短編集『風の便り』（利根書房）に収録された太宰治の短編である。

まず、「律子と貞子」のプロットを紹介する。

三浦憲治は「ことしの十二月」⁽¹⁾に大学を卒業し、徴兵検査を受けたが、極度の近視眼のため、丙種となった。田舎で中学教師になり、結婚するつもりだが、遠縁の旅館の姉妹どちらを嫁にしたいか迷っている。彼女たちと久しぶりに再会した時に、姉の律子は旅館に宿泊しているお客さんをおもてなしするのに忙しく、三浦君をあまり相手にしないのに対し、妹の貞子は三浦君の来訪を喜び、彼の関心を引くために必死になる。三浦君がどちらと結婚するべきかと語り手の「私」に相談に訪れた際、「私」は「一瞬も迷わ」ず、三

タリヤルヴ・マルギス

浦君にルカ伝十章三八のマルタとマリヤの物語を読ませる。それは次のようなものだ。

ある村で、イエスはマルタという女の家を訪問する。マルタは献身的にもてなし歓迎したが、同居している妹マリヤは手伝うこともせず、イエスの話だけ聞いている。そこでマルタは「饗応のこと多くして心いりみだれ」、イエスに「主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思ひ給はぬか、彼に命じて我を助けしめ給へ」と懇願した。イエスは「マルタよ、マルタよ、汝さまたまの事により思ひ煩ひて心勞す。されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善きかたを選びたり。此は彼より奪ふべからざるものなり」と彼女に返事した。

それから十日後、三浦君は姉の律子と結婚する事を決める。「私」は、「義憤に似たものを感じた。三浦君は、結婚の問題に於いても、やつぱり極度の近視眼なのではあるまいか。読者は如何に思うや」と述べているように、三浦君が貞子を選ばなかったことについて不

満と当惑をあらわにする。

『太宰治全集 第四巻』の「解説」によると「律子と貞子」は一九四一年十二月下旬に執筆脱稿されたものである。一九四一年十二月は周知のとおり「衆庶ハ各々其ノ本分ヲ尽シ億兆一心国家の総力ヲ挙ケテ征戦ノ目的ヲ達成スル」という庶民を戦争に動員する裕仁天皇の宣戦布告詔書がラジオで放送され、メディアにおいて大きな反響を呼んでいた時期である。

本稿の目的は、宣戦布告詔書という歴史的なコンテキストを視野に収めながら、「律子と貞子」における女性像とその読解の可能性を考察することである。

二、先行研究と問題設定

宣戦布告詔書という歴史的なコンテキストのなかで、古い旅館の娘のうち、どちらか良い嫁になるかという「律子と貞子」のプロットは意外と平和的にも見える。

太宰治研究史においては、戦時下に創作されたにもかかわらず、時代背景の要素が少ないテキストが、長い間作家太宰治の戦争への無関心あるいは抵抗として解釈されていた。例えば鳥居邦朗は「律子と貞子」が収録されている短編集『風の便り』を「戦意高揚の国策文学以外は非常時に無益有害と目された時期に、純文学の作品集を出す太宰治の覚悟⁽²⁾」として評価している。近年では太宰治の戦時

下のテキストを新たな観点から読み直す研究が盛んになっているが、「律子と貞子」は筆者の知る限りまだ戦時下のテキストとして論じられていないのだ。⁽³⁾

神谷忠孝、安藤宏編『太宰治作品研究事典』（勉誠社、一九九五年十一月）でも指摘されているように、従来の先行研究において「律子と貞子」は恋愛の表現、あるいは聖書との関係で論じられていた。また「私」のスタンスを太宰治という作家の聖書観、あるいは恋愛観に還元する傾向もまだ強いのである。たとえば武田秀美は「この作品のテーマは、貞子のあり方に見られるように、愛の行為の本質は、世俗的な常識に囚われない率直な愛情表現であるということになるであろう」というように「律子と貞子」を「純粋に人を愛し」ている貞子の物語として解釈しており、「作者太宰が自らの一つの恋愛観と価値観とを表現している作品」という作家論的な読み方をしている。⁽⁴⁾ また、佐古純一郎は「太宰は三浦君に貞子のほうを選んで欲しかったのです。律法ではなく福音を選んで欲しかったのです」というように、「律子と貞子」を作家太宰治の聖書観として見ている。⁽⁵⁾

しかし「律子と貞子」のテーマである結婚観は、平和的に見えるとはいえず、戦争する国家にとって重要な国策でもある。何故なら、「正しい」結婚観は出産と母性保護を優先することで国家の生殖装置になり、戦争にとって必須である健康な人間資源を確保できるからである。既に多くの研究によって指摘されているように、

一九四〇年前後は、国家のための結婚＝生殖が主張されるようになった時期である。

一九三八年に創設された厚生省は、一九四一年一月二日に「人口政策確立要綱」を決定し、結婚の年齢を平均より三年早め、出産奨励、そのための家族制度強化維持などの方策を提示した。また、一九三九年に省内で開かれた「優生結婚座談会」は同じ一九四一年に「産めよ殖やせよ国のため」などを唱える「結婚十訓」を定めた。⁽⁶⁾

同時代のメディアにおける結婚観にも大きな転換を確認することができる。たとえば、斉藤道子が指摘しているように、一九四〇年一月の『主婦之友』においては「日本の結婚は神の国の礎を固める結婚である。高望みせず白衣の勇士に嫁げ、農村の娘は大陸へ嫁げ」(「事変下の娘の結婚の問題座談会」)というように、傷痍軍人や満州移民との結婚は戦争努力として命令されるようになる。また、これまで自由主義者として知られていた岸田国士も、「結婚の新体制」(一九四一年一月号)で自由主義的結婚の弱点を克服して新しい結婚理論を考えなければならぬと唱えている。⁽⁷⁾「律子と貞子」が掲載される四ヶ月前の『若草』一九四一年一〇月号の「感想・評論」欄でも、今津迪子は「結婚観の変移」が「非常時は結婚の上でも非常時である」と主張し、「現在の結婚は単に一男一女の「幸福」なる結婚のみではなく、民族と国家とのつらなりを、より強調されることになる」と述べている。

なお、こうした動きの中では恋愛という概念は否定的な意味を持ち、恋愛結婚は出産よりエロス、というような国家にとって危険なものとして見られてきた。例えば、女性の結婚観をリードしていた菊池寛の一九三八年から一九三九年まで『主婦之友』に連載されていた長編小説『結婚天気図』においては、肉体的で自由な恋愛と封建的なお見合い結婚から発生した恋愛が対比されているが、結局その戦いで勝つのは恋愛ではなく、父親への孝行である。また、文部省が一九三九年に思想を「健全」にするために、「恋愛」ものを高校と大学予科の語学教科書から排除することを決めたこともその一つの証拠として挙げられる。⁽⁸⁾

そこで、貞子が恋愛の表象であるという先行研究からみる読解をふまえるなら、「律子と貞子」を国家権力に抵抗する作品と解釈してもよいのだろうか。しかし、そうするなら「ハワイの事、決死の大空襲よ、なにせ生きて帰らぬ覚悟で母艦から飛び出したんだって」、「あたし達だつて徴用令をいただけるの」、「ニュースの時間、茶の間へラジオを聞きに行きませう」という貞子の独白から窺える実に高い国民意識、戦争が始まった(十二月八日)に対する強い国民的な感動を一体どう考えるべきだろうか。

李顯周が「太宰治の「十二月八日」と雑誌『婦人公論』をめぐる」で「戦時下のメディアは国策のプロパガンダという新たな要素を強いられ、それはまた作家たちの創作にまで及ばざるを得なかったのである」⁽⁹⁾と指摘しているように、当時の雑誌メディアは厳しい

検閲の対象となっており、個人的な愛情問題を書くのが戦時下としてふさわしくないものとして批判され、国策のプロパガンダが一切入っていない作品は掲載対象にならない可能性が高かったのだ。そこで、貞子の言葉に混入されている国民意識は、作家太宰治の自己検閲にも還元できるかもしれない。

しかし、厳しい検閲状況が背景にあったなかでも、「私」が高い国民意識を表現する女性をマリヤに喩えたことを無視してはならないと思われる。本稿においては作家論的な観点を避け、貞子の読解可能性をテキストの構造と歴史的な言説から追及したい。

三、国家言説を拡張できる女性像

まず、テキストの構造を確認していく。「律子と貞子」の中心的な女性人物は、ネーミング、外見（律子は顔も細長く蒼白、貞子は丸顔）、性格（律子はしつかり者、貞子は騒ぎ廻っている）、自己表現（律子の沈黙、貞子の溢れたような話ぶり）、マルタとマリヤの比喩によって、明らかに対照的な女性像に分類されている。

こうした対照的な女性像を読者に媒介するのは二人の男性である。第一の媒介者は貞子の発話、また律子の沈黙を理解できない「内種」になった三浦君であり、第二の媒体者は三浦君の話を読者に伝える「私」である。三浦君はおそらく、この姉妹の行為について助言、あるいは説明を求めに行くのだが、「私」は三浦君に助言

を与える代わりに、「福音」＝文字テキストを引用している。「私」は文字テキストによって貞子をマリヤ、律子をマルタに喩えるが、その喩えを理解できない、あるいは賛成しない三浦君は「私」の予期に反して律子と結婚する。要するに「律子と貞子」の主な問題は二人の女と二人の男、または「実際の」女性像と文字テキストにおける理想像の間のディスコミュニケーションなのだ。

男性の媒介者が女性たちを二者択一的に分類し、理想的な女性像を（女性）読者に伝えるという構造から「律子と貞子」は男性中心主義を反映するテキストであると確認できるわけだが、ここでは少し観点を変えて、「私」が媒介する貞子像が同時代の国家イデオロギー批判として機能している、という読解の可能性について考察したい。

「甲府からバスに乗って御坂峠を越え、河口湖の岸を通り、船津を過ぎると、下吉田町といふ細長い山陰の町に着く。この町はづれに、どつしりした古い旅籠がある。問題の姉妹は、その旅館のお嬢さんである」という地理的描写、また姉妹たちの学歴と二つの家族の繋がりという事実を込めている「私」の語り方は読者に、律子と貞子の事件は実際に起こったという印象を与えるのだが、「私」の語りの内容はこうした印象を相対化していると思われる。例えば、「私」は「姉妹にも迷惑をかけるような事になるといけないから、こんな仮名を用いるのである」という言い訳をし、姉妹を律子と貞子と名付けている。しかし、「私」が実際にも語りのモデルになる

姉妹たちのアイデンティティを隠したかったら、律子と結婚する三浦憲治の本名も発表してはならなかっただろう。そこで、「私」が三浦のフルネームを隠そうとしないから、憲治も仮名であることは充分に考えられる。

こうした仮名の組合、憲治Ⅱ憲法・政治、律Ⅱ秩序、貞Ⅱまことはテキストの内容の象徴的な読み方を指示する読解コードになっていると思われる。というのは、憲治が貞子Ⅱ心正しい嫁より、律子Ⅱ秩序を守る嫁を選ぶことで、三浦君だけではなく国家の結婚観が「近視眼」という言葉に象徴され、批判されているという解釈が可能になるのだ。

前述したように、一九四〇年前後は、結婚観の言説が大きく転換した時期だった。恋愛結婚は否定的な意味を持ち、結婚は国家のための努力として宣言されるようになった。

ロマンチックな恋愛が非国民的な表現になってタブー化されてきたという政治とメディアの言説が背景にあったと考えると、「律子と貞子」は「私」が貞子を選択することで、世間に抵抗し〈恋愛〉を選ぶ、という前述した武田論に近い読み方を引き寄せると認められる。

ただし、「当時の日本に伝統として存在していた封建的、儒教的倫理観に基づき、何ごとも控えめで、世間体を気にし、自らを律しようとする」律子を典型的な女性像、一方で「純粹に人を愛し、既成概念に囚われずに人に接せる」貞子作家太宰が創出した新しい

女性像として指摘している武田氏の解釈はある意味でアナクロニズムである。なぜなら、自由な男女関係を代表する「新しい女」は、太宰治のオリジナル創出ではなく、一九二〇年代の技術的機械的な成長と都市化の時代の言説によって形成されたモダン・ガールの女性像として既に存在していたからである。

モダン・ガールは主に自由な愛とセクシュアリティを信じている女性として語られており、彼女のテキスト上の機能としての役割は自由な愛という提喻として、個人主義などの近代的な価値観の表象になり、控え目で家に閉じ込められた「伝統的な日本の女性像」に挑戦することによって、封建的な価値観、家制度に対立することでもあった。⁽¹¹⁾なお、大正・昭和初期の文学テキストにおいて、モダン・ガールは性欲化され、特に一九四〇年前後に、自由恋愛のみならず恋愛結婚も批判する言説において、否定的な女性像として語られてきた。⁽¹²⁾

三浦君と自由に会話している貞子は第一印象として、自由な愛を代表したモダン・ガールとよく似ていると思われる。例えば、次の引用から貞子が伝統的な律子に挑戦することを確認することができる。

あくる日、三浦君は、おいとまをした。バスの停留所まで、姉と妹は送って出た。その途々、妹は駄々をこねてゐた。一緒にバスに乗って船津までお見送りたいといふのである。姉は一言のもとに、はねつけた。

「私は、いや。」律子には、いろいろ宿の用事もあつた。のんきに遊んで居られない。それに、三浦君と一緒にバスに乗つて、土地の人から、つまらぬ誤解を受けなくなつた。おそろしかつた。けれども貞子は平気だ。

「わかつてるわよ。姉さんは模範的なお嬢さんだから、軽々しくお見送りなんか出来ないのね。でも、あたしは行くわよ。もうまた、しばらく逢へないかも知れないんだものねえ。あたしは断然、送つて行く。」

貞子はまさにモダン・ガールのように、古い道徳を尊重する律子を否定しながら、三浦との交際において感情に従う女性像として自己を確立していることがわかる。ゆえに非常時の結婚観が主張する国家のため、家族のため、という結婚観に挑戦する女性像として貞子を捉えることができる。

ところが、ここには大きな問題がある。貞子のとめない発話にみられる自己確立を単なる「愛の表し方の稚拙さ」⁽¹³⁾あるいは武田氏という「世俗的な常識に囚われない率直な愛情表現」と解釈することは充分なのだろうか。なぜなら、本稿の「はじめに」において指摘したように、貞子は三浦君に対してのみならず、「こんど泣いた？ 泣いたでせう？ いいえ、ハワイの事、決死的大空襲よ」というように国家に対しても温かい感情と高い国民意識を表現するからである。また、細江氏も指摘しているように「丙種になった憲治

に、血判の嘆願書を以て現役希望を提出するように勧めている」⁽¹⁴⁾ので、同時代の息子を戦士になるように奨励する「軍国の母」という理想像にも似ているのだ

要するに、「律子と貞子」においては（家（古い）／恋愛（新しい））という二者択一的な女性のプロトタイプの設定を確認することができる。しかし「私」は貞子を選択することで必ずしも国家言説に抵抗するわけではないのだ。むしろモダン・ガールという女性像を、三浦君と国家の両方とも素直に愛することができる女性像に拡大することで国家言説を拡張し、非常時の結婚観によって成立する国民と国家の関係を再構築すると言った方が正確であろう。ただ、こうした結論を出す前に、貞子が国民意識を如何に表現しているか、を丁寧に分析していく必要があると思われる。

四、〈十二月八日〉という時間軸

長い引用になるが、貞子の発話の特性を把握するためにまず次の文章を読んでほしい。

「兄ちゃん、少し痩せたわね。ちよつと凄味が出て来たわ。でも色が白すぎて、そこんところが気にいらないのだけど、でも、それでは貞子もあんまり慾張りね、がまんするわよ、兄ちゃん、こんど泣いた？ 泣いたでせう？ いいえ、ハワイの事、

決死的大空襲よ、なにせ生きて帰らぬ覚悟で母艦から飛び出したんだつて、泣いたわよ、三度も泣いた、姉さんはね、あたしの泣きかたが大袈裟で、気障つたらしいと言つたわ、姉さんはね、あれで、とつても口が悪いの、あたしは可哀想な子なのよ、いつも姉さんに怒られてばかりあるの、立つ瀬が無いの、あたし職業婦人になるのよ、いい勤め口を捜して下さいね、あたし達だつて徴用令をいただけるの、遠い所へ行きたいな、うそ、あんまり遠くだと、兄ちゃんと逢へないから、つまらない、あたし夢を見たの、兄ちゃんが、とつても派手な緋の着物を着て、さうして死ぬんだつてあたしに言つて、富士山の絵を何枚も何枚も書くのよ、それが書き置きなんだつてさ、をかしいでせう？ あたし、兄ちゃんも文学のためにたうとう気が変になつたのかと思つて、夢の中で、ずいぶん泣いたわ、おや、ニュースの時間、茶の間へラジオを聞きに行きませう、兄ちゃん今夜、サフォオの話を聞かせてよ、こなひだ貞子はサフォオの詩を読んだのよ、いいわねえ、いいえ、あたしなんかには、わからないの、でもサフォオは可哀想なひとね、兄ちゃん知つてるでせう？ なんだ、知らないのか。

引用した箇所からわかるように、三浦君に向けている貞子の発話は、真珠湾攻撃、ラジオ、徴用令などの対米英戦開戦の日、すなわち〈十二月八日〉をめぐる言説と関わる記号をたくさん含んでいる。

しかし、貞子はその記号による話を深めるのではなく、一つの記号を取り上げた直後、まったく新しい記号へと切り替えてしまうのだ。例えば、貞子は「ニュースの時間」と戦場の情報を聞きたいというように高い国民意識を見せるが、次の瞬間「サフォオの話を聞かせて」と、国家イデオロギーにむしろ危険なもの、ロマンチックな恋愛と自殺の讃美を代表するサフォオを聞きたいものとして挙げる。

次に〈十二月八日〉をめぐる文学言説を踏まえ、このような狂気も似た語り方はどんな意味を持つかを調べてみよう。

〈十二月八日〉との関係で最もよく論じられている太宰治テキストはおそらく一九四一年十二月八日の直後に創作されている「十二月八日」（『婦人公論』二十七卷第二号、一九四一年一月）である。「十二月八日」に関する先行研究は多いのだが、最新論としては松本和也「十二月八日」をいかに書くか¹⁵が挙げられる。松本氏は、国民が国家と一体化したという共同的な自覚の時間軸として語られていたという〈十二月八日〉をめぐる文学言説を踏まえ、太宰治の「十二月八日」は、〈十二月八日〉の言説に重なりながら、それを「日常」などの異なる時間軸によつて相対化され、攪乱される文学テキストであると指摘している。例えば、松本氏は〈十二月八日〉の典型的な例として特集「戦ひの意志（文化人宣言）」（『文藝』第一〇巻一号、一九四二年一月）に発表された島木健作の「十二月八日」を挙げる。

宣戦の大詔を拝し奉った瞬間の自分は総身がふるへるやうな厳肅な感動のなかに、なんともいへぬ明るさ、いよいよ事は決したといふ落着きと安心を感じた。ラジオの前の自分の頭は自然に垂れ、眼には涙がうかんだ。(略) 一切の躊躇、逡巡、遲疑、曖昧といふものが一掃されてただ一つの意志が決定された。瞬時にしてこの意志は全国民のものとなつたのである。(略) 私は日本の国柄の有難さ尊さを今さらのやうに肝に銘じて感じた。(二四二―二五頁)

松本は島木健作の作品について「ラジオ放送に心身を揺さぶられる感動を受け、これまでのもやもやがカラッと吹き飛び、国民としての自覚を新たに国家に一体化し、日本を崇め感謝する、というのが当時の十二月八日言説が共有した構造であり、その意味で島木の一文は典型的なものとみてよい」⁽¹⁶⁾と述べている。なお、松本氏によると、同様な国民としての自覚、時間軸の変更は太宰治の「十二月八日」の「私」の語りからも確認することができる。

「大本営陸海軍部発表。帝国陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり。」

しめ切つた雨戸のすきまから、まつくらな私の部屋に、光のさし込むやうに強くあざやかに聞えた。二度、朗々と繰り返した。それを、じつと聞いているうちに、私の人間は變つてしま

つた。強い光線を受けて、からだは透明になるやうな感じ。あるいは、聖霊の息吹きを受けて、つめたい花びらをいちまい胸の中に宿したやうな気持ち。日本も、けさから、ちがう日本になつたのだ。

松本氏は、「ここでも、十二月八日が一大転機として把握され、「私」の認識枠組みの劇的な変容が、「日本」のそれと期を一にして遂げられている」⁽¹⁷⁾と認めながら、「私」は同時に「十二月八日」の時間軸を相対化していると指摘している。例えば、「私」は「先日」、「去年」、「以前」などの語を頻用して、不特定の過去と「十二月八日」の異なるパラダイムを日記に書き込み、「相変わらず、品が乏しい」、「町の様子は、少しも変わっていない」というように不変を示す表現によって「十二月八日」の絶対性を相対化しているという。

では、「十二月八日」の直後に発表された「律子と貞子」においては「十二月八日」という時間軸が如何に表現されているだろうか。

「兄ちゃん、こんど泣いた？ 泣いたでせう？ いいえ、ハワイの事、決死的上空襲よ。」

引用した箇所から、貞子は、「十二月八日」を国民の共有してい

る意識の契機として把握し、強い国家意識を現していると考えられる。なぜなら貞子は「こんど泣いた？ 泣いたでせう？」というように〈十二月八日〉のコンテキストを加えずにも、三浦君が彼女の涙の意味を直ぐ把握することができると推測しているからである。なお、このような発話から、貞子が三浦君から求めるのは男女間の恋愛ではなく、一億一心の心情なのではないかとも考えられる。一方で、「いいえ」という三浦君の無理解を反響する発話はこうした貞子の要求を裏切り、〈十二月八日〉という時間軸の変容も否定しているといえるのだ。

しかし、貞子の発話をもっと丁寧に分析すれば、その時間軸を攪乱するのは三浦君の無理解ではなく、実は貞子自身であるということが分かる。なぜなら、松本氏が「十二月八日」の「私」について指摘しているように、貞子も〈十二月八日〉という時間軸を物まねや、他の時間軸と文化的に共有する意識によって混乱させているからだ。

たとえば、貞子は国家のために泣いたと述べている後に「兄ちゃんも文学のためにたうとう気が変になったのかと思って、夢の中で、ずいぶん泣いたわ」というように、〈十二月八日〉という歴史的な時間軸と戦場と繋がっている涙を、時間が存在しない夢の領域と幻想的な涙と同じ水準で並列し、混乱させるのだ。

また、「兄ちゃん今夜、サフォの話を聞かせてよ、こないだ貞子はサフォの詩を読んだのよ、いいわねえ、いいえ、あたしなんか

には、わからないの、でもサフォは可哀想なひとね、兄ちゃん知ってるでせう？ なんだ、知らないのか」という発話から分かるように、貞子が三浦君との共同意識を要求するのは〈十二月八日〉の場合だけではなく、文学の場合でもある。しかも、「あたしなんかには、わからないの」という発話が可視化するように、貞子を実際にサフォから生じるはずの文化的な共同意識を理解できないのだ。こうした無理解から貞子はおそらく〈十二月八日〉の国民的な共同意識の意味も理解できず、大空襲で亡くなった日本人の兵隊たちをサフォと同様に、ただ「可哀想な」人々としてしか把握できないのではないかと推測できる。

つまり、貞子は〈十二月八日〉という「国民が共有する特権的支配的な時間軸」⁽¹⁸⁾を幻想と文学記号が生み出す共同意識によって攪乱していると言えるのだ。また、このような攪乱は三浦君と貞子のディスコミュニケーションの主な原因になると思われる。

では、このように〈十二月八日〉の言説を攪乱する貞子の狂気をマリヤに喩えることで聖化する「私」の意図はいったい何であるのだろうか。それを明らかにするために、もう一つのディスコミュニケーション、すなわち姉妹の間に起こったディスコミュニケーションを分析してみよう。

五、間違った泣き方

貞子の行為と発話を理解できないのは三浦君だけではなく、貞子の姉、律子でもある。

貞子は〈十二月八日〉の、「決死的大空襲」のために「泣いたわよ、三度も泣いた」と述べている。一方で、律子は（少なくとも貞子の言葉によると）彼女の〈十二月八日〉のために泣いた涙を「大袈裟で、気障つたらしい」と批判している。律子の言葉は〈十二月八日〉の否定としても考えられるかもしれないが、ここで注意をしたいのは、律子は貞子が大空襲のために泣いたということより、「気障」、「大袈裟」というように貞子の泣き方における演技性を批判しているということである。

若桑氏は前述した論において国家のチアリーダーという表現を使っている。国家チアリーダーはもともとジーン・ベスキー・エルシュテインの概念であるが、若桑みどりはそれを母性と（補助）労働力の傍ら戦時下の日本人女性の一つの役割として挙げており、エルシュテインの『女性と戦争』（廣川紀子訳、法政大学出版局、一九九四年四月）に基づいて、チアリーダーについて次のように述べている。

チアリーダー。戦う男たちを観客席で見守り、囃し立て、応援

し、歓呼し、涙を流す女たち。これこそ歴史に残るかぎりの遠い昔から、戦争において女たちが果たしてきたもつとも普遍的な任務ではなかったか。「中略」戦争で戦いかつ死ぬ戦士たちにとって、その最高の慰賞は「名誉」であるが、その名誉は記憶によって語り継かれ、記録になればならない。母親や妻の涙はクロス「合唱团」の叫びのように戦士を栄光化する。

（二二三頁）

若桑みどりは女性の涙は戦争のために不可欠なものであると指摘している。そこで、真珠湾攻撃で亡くなった兵隊のために泣いていた貞子は、若桑みどりが描写する国家のチアリーダーに見える。しかし、若桑論からも確認できるように、当時の婦人雑誌の表紙に揭示されている戦死した夫の霊前に祈る未亡人の顔は熱情な貞子と異なり知的、冷静な表情をしている。また〈十二月八日〉をめぐる文学言説においても、その日の気持ちは狂氣的なものではなく、落ち着いた、静かなものとして回想されている。例えば、一九四二年一月に『現地報告』五二号に載った小林秀雄「三つの放送」では、〈十二月八日〉の放送について、「眼頭は熱し、心は静かであった」というように書いている⁽¹⁹⁾。また、真杉静枝は「眼鏡の小母さん」（『文芸』一九四一年一月）で〈十二月八日〉の翌日に騒動しているバスの乗客を静める車掌の落ち着いた声を次のように絶賛している。

その声は、いかにも、まるで何ごともなかったような、すがすがしい、静かな美しい声量を自慢にした声であつた。そして、こんな、美しい静かな車掌の声が、この興奮してゐる、騒動してゐる車内の雰囲気にもたらず、よい影響を、ちゃんと、計算している。(九十三頁)

貞子の三回も泣いている涙、とめどないしゃべり方は熱情で、冷静ですがすがしい国家応援の姿勢と正反対である。しかも、三回という繰り返しは(十二月八日)の時間軸を相対化し、他者の目から「気障」に見えるために、(十二月八日)が引き起こすはずだった身体的かつ自然な国民意識の変化に、演技の可能性を可視化しているということである。

なお、同様な「気障」、すなわち演技性は他の戦争努力を表現する貞子の発話と身体動きからも確認できる。例えば、「姉さんはね、あれで、とつても口が悪いの、あたしは可哀想な子なのよ、いつも姉さんに怒られてばかりゐるの、立つ瀬が無いの、あたし職業婦人になるのよ、いい勤め口を捜して下さいね、あたし達だつて微用令をいただけるの、遠い所へ行きたいな、うそ、あんまり遠くだと、兄ちゃんと逢へないから、つまらない」という発話において貞子は国家のために頑張りたいという意志を次の瞬間に三浦君にアピールするための冗談に転換し、自分のチアリーダーの役割が正に演技ではないか、という可能性を可視化している。

なお、三浦君がバスで出発する場面は以下のように語られている。

三浦君のバスは動いた。いきなり妹は、くるとこちらに向き直つて一散に駆けつけた。バスも走る。妹は、泣くやうに顔をゆがめて二十メートルくらゐ追ひかけて、立ちどまり、「兄ちゃん！」と高く叫んで、片手を挙げた。

引用した箇所において貞子の姿は正に婿を戦場に送るメロドラマチックなヒロインを思い出させる。しかし、三浦君は貞子の婿、戦場へ向かう兵士ではなく、甲府へ帰る丙種である。ゆえに、貞子のメロドラマはこの場面にふさわしくなく、むしろ演技か滑稽に見えるのだ。

つまり、貞子は「伝統的な結婚相手のアンチテーゼ」⁽²⁰⁾になっているだけではなく、気障と無知によつて愛国主義を表現することで、冷静な国家チアリーダーのアンチテーゼになっているとも考えられる。

では、こうした冷静な国家チアリーダーのアンチテーゼの貞子を神聖化する「私」の意図は何なのだろうか。武田氏は、「私」が「貞子に「道化」を通して真情を吐露させている」と指摘している。「律子と貞子」を作家の太宰治の恋愛観を表現する作品として読み取っている武田氏は、その「真情」として閉塞的な社会に自由に表現できない個人的な恋愛を考えている。しかし、貞子の三浦君の前

でのコケツトリーの裏には純粋な恋愛があるという解釈をすれば、彼女の国家の前での演技性の裏に純粋な愛国主義があるという可能性が発生するのだ。貞子をマリヤに喩えることによって「私」は貞子を国家チアリーダーのアンチテーゼの位置から救い、彼女の気障に見える国家応援の底にある、戦時下の言説において理想化されている冷静な女性像のために誠実に表現できない、熱情的な愛国主義を吐露しているといえるだろう。すると、「律子と貞子」はまさに愛国主義の言説を拡張するテキストとして読み取れるのだ。

しかし、「私」は語り手として貞子を救う力、つまり彼女の狂気の裏にある天使を吐露する力をはたして持っているのだろうか。それを確認するためにはもう一度「私」の語りの構造を分析していく。

前述したように「律子と貞子」は象徴的な物語である。ところが、物語の語り手の「私」は、媒介している『実際』の事件と象徴を一致しているように読者に伝える権力を持っているわけだが、「私」が媒介する『実際』と象徴の間にはずっと緊張が残っているのだ。

例えば、小林幹也も指摘しているように「私」は、三浦君が律子を選んだのは、「私」との相談の上、律子の伝統的な価値観の為である、という印象を読者に与えたい。しかし、姉妹と再会したとき、「律ちゃん。」なぜだか、姉のはうに声をかけた」という「私」の語りが明かすように、三浦は律子の伝統的な価値観が明らかになる前から、〈なぜだか〉というおそらく単純な倫理によって説明で

きない理由で律子に心惹かれている⁽²²⁾。

また、「三浦君は、首をかしげて考えていたが、やがて、淋しそうに笑って、〈ありがとう。〉と言った」という謎めいた箇所も、嫁の選択で誤っているのはおそらく「私」ではないか、という解釈を可能にしている。

そして最も大きなズレといえば、「私」が媒介する実際と引用する文字テキストのズレである。というのは、武田論と小林論においても指摘されているように、貞子は語る女、律子は沈黙する女であるが、「福音」においてイエスに声を掛けるのはむしろマルタであり、マリヤは聴く女として語られているということである。しかも、テキストが明かすように貞子の語りは実際に「私」の取捨選択によって構築されているものである。貞子の発話は引用符に囲まれていることは「私」がそれをできるだけ誠実に読者に伝えるという印象を与えるけれど、「兄ちゃん！こつちを向いて、顔を見せて！そうれ、ごらん、心にやましきものがあるから、こつちを向けなさい」「おや、笑つたな、ちきしやうめ」「わあい、見破られた、ごめんね、怒つた？」などの箇所からわかるように、三浦君は少なくともある程度まで貞子の発話に反応した。要するに、貞子の独白はもともと三浦君との対話であったが、それがとめない、狂気的な独白になってしまうのは三浦君の反応を排除する媒介者のためである。

既に指摘したように、「私」の狙いは貞子の発話を象徴にすること

とであるが、「私」の語り方は同時に、こうした象徴化の暴力性を可視化し、その正確さに疑問を起こさせられると思われる。しかも、「読者は如何に思うや」という最後の問い掛けで、「私」は自らも自分の解釈に疑問をあらわにしており、その絶対性を相対化しているといえるのだ。

こうした緊張と疑問をこめている語り方は、読者に「私」の解釈を文字通りに受け取らせるといふより、「実際」と文字テキストのズレから新たな解釈を追求するように促していると思われる。

六、終わりに

松本氏も指摘している通り、戦時下の太宰治テキストに対する近年の先行研究の主な傾向としては、テキストの両義性を論じることが挙げられる。たとえば、佐藤友哉は「十二月八日」について「戦争嫌いから見れば反戦争小説に、戦争好きから見れば国策小説に見えるように書かれている」と述べている。同様な両義性は「律子と貞子」についても指摘することができる。

「私」の語りは実際の世界と文字テキストという理想のズレを無視し、暴力性も込めているものである、ゆえに「私」が構築する女性像は、結局多義的な解釈を包含する曖昧なものとして残るのだ。貞子の三浦君に対する気持ち、また愛国主義は生意気さから生まれたものであるのか、自意識過剰から生まれた皮肉か、故意な演技で

あるのか、また「私」が貞子に対して讃美するのは愛国主義か、自由な恋愛か、意図的な滑稽であるか、という最後の判断は読者に任されている。

国家意識が高い読者は、「律子と貞子」を恋愛と愛国主義を統一し、国家言説を拡張するテキストとして読むことができる。一方で、恋愛を讃美する読者の場合は、先行研究でよく見られるような恋愛至上主義的な読み方も可能である。さらに、読者がテキストを「三種」の三浦君の観点から読めば、恐らくまた異なる読み方が発生するはずだ。

一九四〇年前後のジェンダー言説において結婚観が転換し、恋愛結婚は個人主義として後景に退けられ、結婚は国家への協力として宣言されるようになった。また、文学テキストにおいては、一九四一年十二月八日という戦争の始まりを宣言した歴史的な日付が国民として自我の意識が確立する時間軸として表徴されてきた。こうした政治的、歴史的なコンテキストにおいてモダン・ガールに近い、高い国民意識を表現する女性像がマリヤに喻えられているという「律子と貞子」は、国家言説を拡張する読み方を引き寄せる。しかし、「私」の語りの構造と貞子の実際の発話の多義性はこうした解釈を相対化し、象徴によって成立するはずの国家と国民の統一性を攪乱するものになっているのだ。

注

- (1) 太宰治作品の引用は筑摩書房版『太宰治全集』全十二巻、別巻一（一九八九年六月～一九九二年四月）による。
- (2) 鳥居邦朗「解題『風の便り』」『名著初版本複製太宰治文学館解説書』（日本近代文学館、一九九二年六月）四七頁。
- (3) 戦時下の太宰治テクストを新たな観点から読む論集としては例えば、斎藤理生、松本和也編『新世紀太宰治』（双文社出版、二〇〇九年六月）、安藤宏編『展望太宰治』（ぎょうせい、二〇〇九年六月）、松本和也『昭和一〇年代の文学場を考える―新人・太宰治・戦争文学』（有斐閣、二〇一五年三月）が参考になる。なお、細江光は「作家論的補説 太宰治と戦争」（『作品より長い作品論』和泉書院、二〇〇九年三月）で「律子と貞子」を「太宰が戦争を肯定していた」という証明を窺える作品として指摘しているが、具体的な作品分析を行っていないのだ。
- (4) 武田秀美「太宰治と『律子と貞子』―作品・『聖書』・キリスト教」『太宰治研究13』（和泉書院、二〇〇五年六月）。
- (5) 佐古純一郎「『律子と貞子』『正義と微笑』」『太宰治の文学』（朝文社、一九九二年四月）。
- (6) 若桑みどり「戦争がつくる女性像」（筑摩書房、二〇〇〇年一月）、加藤秀一「『恋愛結婚』は何をもたらしたか―性道徳と優生思想の百年間」（筑摩書房、二〇〇四年八月）論を参照。
- (7) 斉藤道子「戦時下の女性の生活と意識―『主婦之友』にみる」（赤澤史朗、北河賢三編『文化とファシズム―戦時期日本における文化の光と影』日本経済評論社、一九九三年十二月所収）、二九九頁。
- (8) 若桑、七六頁。
- (9) 李顯周「太宰治の『十二月八日』と雑誌『婦人公論』をめぐる」（『日本語と日本文学』第三四号、二〇〇二年二月）。
- (10) 武田氏は前述の論で『新字源』（角川書店、一九六八年一月）によると「律」は「のり、おきて、さだめ。」の意を表し、「貞」は「まこと、まこ

ころ、真の者。」の意を表し、と指摘している。

- (11) モタン・ガールの誕生については Barbara Sato, *The New Japanese Woman: Modernity, Media and Women in Interwar Japan*, Duke University Press, 2003より論を参照。
- (12) 否定的なモタン・ガール一つの典型的な例としては例えば前述した菊池寛「結婚天気図」における既婚男性を誘惑しているかほるという女性登場人物を挙げられる。
- (13) 陸根和は「太宰治『律子と貞子』論―愛に破れたものへのいたわり」（『解釈』一九九五年十二月）で、「この場合それは真に自分を愛している者の姿の见えない男、すなわち貞子の愛を感じることのできない鈍い男として皮肉ったわけであり、それを裏返せば、この小品のテーマは、無償の愛をささげながら、その愛の表し方の稚拙さのゆえに愛に敗れた者へのいたわりであり、いとおしみであるということになるだろう」と述べている。
- (14) 注三に掲げた細江光論、一二三頁
- (15) 松本和也「昭和一〇年代の文学場を考える―新人・太宰治・戦争文学」（有斐閣、二〇一五年三月）。
- (16) 松本、三二二頁。
- (17) 松本、三二五頁。
- (18) 松本、三三四頁。
- (19) 曾根・博義「十二月八日―真珠湾―知識人と戦争」（『国文学』二〇〇六年五月号）による。
- (20) 武田論。
- (21) 小林氏は「トカトントン」試論―「律子と貞子」との比較を通して」（『縦覧』、一九九七年六月）で「なぜだか」の部分に傍点を振ったのは、「私」であるが、この「なぜだか」は実に思わせぶりである。実際、「なぜだか」などと書かなくても十分に意味は通ずる。にもかかわらず、「なぜだか」と記されている背景には、ここに憲治の恋心が隠されている以外の

理由はあるまい」と述べている。また「太宰治『律子と貞子』論―作為者の交替とされに伴う生活変更―」（『縦覧』、一九九七年十二月号）で、小林氏はルカ伝のマルタと律子を比較しながら、律子はマルタのような「心入りが乱れ」な性格ではなく、こうした性格はむしろ貞子に挙げられているという興味深い事を指摘している。しかし「〔私〕に律子への思いを伝えることができず、逆に貞子の方を勧められてしまった三浦は、その段階では〈愛に敗れた〉ものである」と述べているように、焦点を貞子から三浦が律子に抱く感情へと移動しながら、結局、陸根和と武田秀美と同様に「律子と貞子」を「純粹な」あるいは「稚拙」な愛の物語として読んでいる。